東京外国語学校史

外国語を学んだ人たち

野中正孝 編著

編著者　野中正孝
体　裁　A5判・上製本・貼箱入り・1、600頁
推　薦　寺﨑昌男
刊　行　2008年11月
定　価　本体価格 9、800円＋税
ISBN978-4-8350-5767-5

「東京外国語学校」（現・東京外国語大学）は、明治初年いらい半世紀近くの間、わが国の唯一の官立外国語学校であり、その後も昭和初期までわが国における外国語学教育の主柱であった。本書は、この学校の知られざる実像、近代日本の国際化を担ったその出身者たちの忘れられた活動の軌跡を、堙滅をまぬがれた関係資料を克明に調査して初めて精細に明らかにしている。

外大同窓・関係者をはじめ、大学史・教育史研究者・研究機関に必備の書

1903（明治36）年、当時の神田区錦町に新築された本校舎。「東京外国語大学史」（1999年刊）より。

不二出版

目次

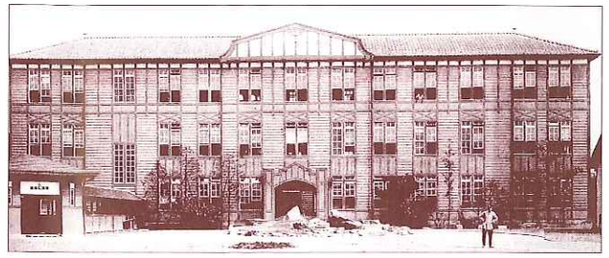
I 初めての官立外国語学校
1 プロローグ
2 外国語学校はいつ開校したか
3 明治七年の東京外国語学校
1 学校長の異動
2 外国教員についての見聞記
3 入学希望者が殺到
4 東京英語学校の分立と英語名人世代
4 語学校の名実共に行はるべき機に至れり
1 「国家の需めに応じ大に有用の器」の育成
2 組織・制度について補記
5 巣立っていった人たち
1 仏語学出身者たち
2 独語学出身者たち
3 露語学出身者たち
4 漢語学出身者たち
5 朝鮮語学科出身者たち
6 東京外国語学校の「合併」
1 「合併」の謎
2 消滅のあとに

II 新しい外国語学校
1 外国語学校再興への動き
2 高等商業学校付属外国語学校の開設
3 復活された英語科
4 外国語学校同窓会の発足

III 明治後期
1 東京外国語学校の独立
1 独立当時
2 「語劇」の始まりと同窓組織
2 明治後期英語出身者たち
1 英語科主任教授淺田榮次
2 新しい英語教育をうけて
3 明治後期英語出身者の進路
3 明治後期仏語出身者たち
1 明治後期仏語学科
2 巣立ちの行方
4 明治後期独語出身者たち
1 明治後期独語学科
2 卒業生の進路
5 明治後期露語出身者たち
1 明治後期露語学科
2 巣立ちの行方
6 明治期西語出身者たち
1 西班牙語科創設期の海外事情
2 教師と生徒
3 南米移民と西語出身者たち
7 イタリア語出身者たち 1
1 伊語科の増設
2 関係稿二篇
8 清語出身者たち
1 清語科のスタート
2 北清事変のエピソード
3 清語出身者の消息
9 韓語出身者たち
1 韓語教員の編成
2 韓語科から朝鮮語学科へ
8 英語出身者たち—大正期
1 英語学者・英文学者（大橋榮三／細江逸記／石田憲次／岩崎民平）
2 教員の推移
3 文学青年記 1
4 卒業生の消息
5 イベリア学と比較文学——二人の先駆者（井澤實／島田謹二）
9 英語出身者たち—昭和戦前期
1 岩崎英語学のなりたち
2 昭和期英語部
3 文学青年記 2
4 卒業生の消息
5 実業に進路を選んで
10 仏語出身者たち—大正期
1 仏語学科から仏語部へ
2 進路の拡がり
11 仏語出身者たち—昭和戦前期
1 昭和期仏語部
2 「昼といふのに空は暗く」
12 独語出身者たち—大正期
1 独語学科から独語部へ
2 多彩な学究（櫛田民藏／權田保之助／大久保幸次／池内信行／笹澤美明）
13 独語出身者たち—昭和戦前期
1 昭和期独語部
2 卒業生の進路
14 イタリア語出身者たち 2
1 瀬沼卓朗「イタリア語科史」稿より
2 昭和十年代卒業生の回想から
15 西語出身者たち—大正・昭和戦前期
1 明治期から大正期へ
2 大正期から昭和戦前期へ
3 スペイン語外交官
4 スペイン文学の翻訳紹介
16 葡語出身者たち
1 ポルトガル語学の始まり
2 葡語入学の推移
3 卒業生のその後
17 泰語出身者たち
1 暹羅語部から泰語部として復活へ
2 泰語部時代
18 戦争の時代
1 「もうあとがない、そういう思いに……」
2 満蒙へ動員されて
3 反英・インド独立運動の工作
4 蘭印からインドネシアへ
5 特攻に出撃した学友

V 東京外事専門学校時代
1 東京外国語学校の改編
1 改編の経緯
2 校舎焼失
2 戦中戦後在学記
1 英米科第一期生
2 フランス科の回想
3 支那科から中国科へ
4 蒙古科の回想
5 インド科新入生の回想
6 戦後のタイ科
7 五年間のフィリピン科
8 戦後の出発
3 戦争は終わらなかった
1 色とりどりの花を身につけて
2 片山日出雄の日記
3 「収容所から来た遺書」
4 失語からの回復

主題の注記／あとがき／人名索引



右写真：1921（大正10）年に麹町区元衛町に完成した新校舎。
中写真：1923（大正12）年の関東大震災により元衛町の校舎を消失し、翌年、麹町区竹平町に仮校舎を新築する。
左写真：1942（昭和17）年頃の校舎。1945年に戦災で焼失する。

III

明治後期

1 東京外国語学校の独立
1 独立当時
2 「語劇」の始まりと同窓組織

2 明治後期英語出身者たち
1 英語科主任教授淺田榮次
2 新しい英語教育をうけて
3 明治後期英語出身者の進路

3 明治後期仏語出身者たち
1 明治後期仏語学科
2 巣立ちの行方

4 明治後期独語出身者たち
1 明治後期独語学科
2 卒業生の進路

5 明治後期露語出身者たち
1 明治後期露語学科
2 巣立ちの行方

6 明治期西語出身者たち
1 西班牙語科創設期の海外事情
2 教師と生徒
3 南米移民と西語出身者たち

7 イタリア語出身者たち 1
1 伊語科の増設
2 関係稿二篇

8 清語出身者たち
1 清語科のスタート
2 北清事変のエピソード
3 清語出身者の消息

9 韓語出身者たち
1 韓語教員の編成
2 韓語科から朝鮮語学科へ

10 明治期の「語劇」

11 東京外国語学校の画期的な発展
1 東洋語学科の増設
2 その時代背景
3 類のない総合的な外国語学校の成立

IV

大正－昭和前期

1 馬来語出身者たち
1 馬来語学科から馬来語部へ
2 教員たちのプロフィール
3 「南海はるか三千里」へ雄飛の夢
4 渡南した馬来語出身者たち
5 昭和の南洋ブームのなかで

2 暹羅語出身者たち

3 ヒンドスタニー語出身者たち
1 明治－大正期
2 昭和戦前期

4 蒙古語出身者たち
1 「モンゴル語科」の誕生と発展
2 蒙古語入学志願の時代背景
3 満蒙史のなかで

5 支那語出身者たち
1 教科書革新運動のころ
2 在学の回想
3 中国語卒業生

6 朝鮮語出身者たち
1 朝鮮語学科の推移
2 卒業生の消息

7 「母校問題」と「語劇」の復活
1 「母校問題」
2 「語劇」の復活とふたたび中止

16 葡語出身者たち
1 ポルトガル語学の始まり
2 葡語入学の推移
3 卒業生のその後

17 泰語出身者たち
1 暹羅語部から泰語部として復活へ
2 泰語部時代

18 戦争の時代
1 「もうあとがない、そういう思いに……」
2 満蒙へ動員されて
3 反英・インド独立運動の工作
4 蘭印からインドネシアへ
5 特攻に出撃した学友

V

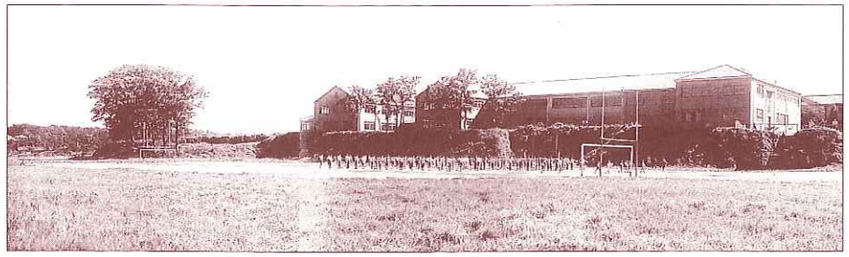
東京外事専門学校時代

1 東京外国語学校の改編
1 改編の経緯
2 校舎焼失

2 戦中戦後在学記
1 英米科第一期生
2 フランス科の回想
3 支那科から中国科へ
4 蒙古科の回想
5 インド科新入生の回想
6 戦後のタイ科
7 五年間のフィリピン科
8 戦後の出発

3 戦争は終わらなかった
1 色とりどりの花を身につけて
2 片山日出雄の日記
3 「収容所から来た遺書」
4 失語からの回復

主題の注記／あとがき／人名索引



右写真：1921（大正10）年に麹町区元衛町に完成した新校舎。
中写真：1923（大正12）年の関東大震災により元衛町の校舎を消失し、翌年、麹町区竹平町に仮校舎を新築する。
左写真：1942（昭和17）年頃の校舎。1945年に戦災で焼失する。

出身者名抄録（順不同）

岡倉天心　村井弦齋　米川正夫　松尾邦之助
加藤高明　川上俊彦　中村白葉　渡邊紳一郎
嘉納治五郎　中田敬義　永田寛定　富永太郎
内村鑑三　川島浪速　会田　由　大杉　榮
田中館愛橘　宮島大八　内山岩太郎　前嶋信次
宮部金吾　小田切萬壽之助　原　誠　山崎榮治
新渡戸稲造　鮎貝房之進　永井荷風　菱山修三
梅謙次郎　古賀十二郎　小田嶽夫　中原中也
富井政章　細江逸記　神谷衡平　北村太郎
寺尾　壽　石田憲次　蒲生禮一　渋沢孝輔
原田直次郎　岩崎民平　朝倉純孝　有島生馬
黒田清輝　鈴木文史朗　三好俊吉郎　高田博厚
和田垣謙三　松本季三志　伊東定典　下位英一
河本重次郎　益谷秀次　井澤　實　赤尾好夫
伊東忠太　櫛田民蔵　新美南吉　前田義徳
巖谷孫藏　権田保之助　島田謹二　岡本良知
内田嘉吉　武田久吉　小川芳男　星　誠
大村仁太郎　大久保孝次　五味川純平　坂本是忠
山口小太郎　池内信行　竹林　滋　小澤重男
安藤謙介　小笠原稔　大橋健三郎　竹内和夫
黒野義文　石原吉郎　山内義雄　青木信治
嵯峨の屋お室　鈴木於菟平　關根秀雄　金岡秀友
二葉亭四迷　布施勝治　石川　淳　田中克彦

編著者紹介

野中正孝（のなか・まさたか）

一九五九年、東京外国語大学第一部（英米科）卒業。中央公論社書籍編集部長、㈳日本シンガポール協会常務理事・事務局長などを歴任。著編書に『ジョホール河畔』（アジア出版、一九八五年）など。

本書を推薦します

大学アイデンティティーの力強い証言

寺崎昌男〈立教学院本部調査役・東京大学名誉教授〉

大学・学校の沿革史は、現在、昔と比べて格段の重要性を持つものになっている。

第一に、その大学・学校の独自性と個性を、学内だけでなく学外・社会に広く宣明する著作になってきた。第二に、在学者や志願者たちが、自分たちの学園はいったい何をめざしてつくられたか、どういう卒業生を生みいかなる貢献を行ってきたかを正確に知る、かけがえのないテキストになってきた。つまり「全入時代」を迎えた現在、各大学・学校がアイデンティティーを確認し、共有し、公示するための貴重な手がかりになってきたのである。また少子化の時代に、大学・学校の「生き残り」を託すツールでもある。

『東京外国語学校史』は、この課題に応える作品だと思う。東京大学の源流の一つでありながらそれから独立し、近代日本の課題とともに外国語学習に深い貢献を果たしてきた独自の学校。しかもその歴史を、出身者たちが、卒業生の姿を視野におさめて記した著作である。石川淳、櫛田民蔵、権田保之助、中原中也、芥川多加志といった多彩な名前を見いだせるのも、限りなく興味深い。すなわち学校制度史だけを追っていたのでは描けないアカデミック・コミュニティー（学問共同体）の業績が、ダイナミックに描かれている。先行研究への遠慮ない批判も盛られていて（筆者たちの仕事もその一つである！）いかにもさわやかである。

1　プロローグ

一八七二年九月、大山彌助はジュネーヴの下宿で、はげ上がってひげ面の隻脚の人物の来訪をうけた。レフ・イリイッチ・メーチニコフと称するロシア人で、大山は「能ク日本語ヲ解ス」と日記（『元帥大山巌傳』所収）に書いているが、メーチニコフのほうは、大山が「何語で話しているのかは判じかね……聞きおぼえある音までが、彼の口から発せられると、わたしの耳にはなにかこう奇妙に空ろに響くのであった」。ともかくメーチニコフの食事でもしながら話をしようとの申し出は通じて、二人は「同車ニテ行キ、夜八字〔時ニ〕帰ル、此人ハ仏ニテ我語〔日本語〕ヲ学ビタリトテ能ク字ヲ読ム、我モ大ニ便ヲ得タリ、故ニ一字ヅツ互ニ教エルコトヲ約」した。

レフ・イリイッチ・メーチニコフは、祖先がモルダヴィア貴族出身の名家の次男で、兄は一九〇八年にノーベル賞を受けた免疫学者である。その弟はペテルブルグその他の大学で学生運動に加わっていずれも放校となり、二一歳のとき、ロシア帝国のパレスチナ派遣の政府代表団に通訳として同行、決闘さわぎを起こして祖国に帰れなくなって、中近東各地を転々とし、一八六〇年にヴェネツィアに潜入した。イタリアは当時、小国群の統一を図る国家再興（リソルジメント）運動の最中で、メーチニコフはガリバルディ軍のスラヴ義勇隊に参加、副官として転戦し、破裂弾で片脚を失った。フィレンツェに移住したメーチニコフは、ロシアの急進派雑誌に評論などを発表したり講演会に出席したりしているうちに、ロシア農民社会主義を理論づけたゲルツェン（ヘルツェン）に認められる。そして、おそらくゲルツェンに紹介されたのであろう、アナーキストのバクーニンがメーチニコフを訪れる。同志もなく官憲の影におびえるバクーニン

岩崎民平ら十四期生が卒業した翌年の大正三年七月、ヨーロッパ大戦が勃発した。十一月九日、淺田榮次は、「此所は静かで宜しいから少し勉強しませう」と言って図書室の書庫に入り、書見しているうちに脳溢血で倒れた。享年四十九歳。

淺田榮次は英学史学界からほとんど忘れ去られた。例えば昭和四十三年出版の日本英学百年史の本には、その明治編に淺田教授は「英語科主任としては実に熱心に英語の基礎を叩き込んで下さった」という加藤謙吉回顧談が引用されているほかには当時の英学者の一人としてその名が列記されているにすぎない。『英語百年』大正十三年十二月号に村井知至「淺田榮次氏経歴」が掲載されたのは例外的である。その経歴書に、「東京外国語学校創立せらるゝや、教務主任を命ぜられ、爾来その死に至るまで十有七年、鞠躬如として教務に従い、親慈以て育英に膺り、……〔文部省の各種〕委員等に任命せられ、英語教育界における功労は決して僅少なものでなかった」とある。また、平成六年に出版されたある日本英語教育史の本には、明治三十六年の帝国教育会の第二回外国語教授法研究部会で幹事・常議員淺田榮次が中学校初級生から外国人教師に教えさせることに反対して「日本人の教師中最も良き者が、先ず初学者に手ほどきをして西洋人との問答ができるぐらいまで力を競けて」やるべきであるという意見を述べた、と記されている一か所があるにすぎない。

〈ページは部分〉

この本文見本は、本書本文を70%縮小しています

関連図書〈復刻版〉のご案内

帝國大學新聞社 刊［大正12年～昭和23年刊］

帝國大學新聞 全17巻・別冊1

本紙は東京帝国大学の学生新聞として学内記事、学問・研究動向を報道したが、単なる学内新聞にとどまらず、日本のジャーナリズム全体のなかで特異な位置を占め、思想・学術動向に少なからざる影響を及ぼした。また、第二次大戦の暗黒の状況下においても、時代への静かな抵抗を試みた新聞の一つである。

◉A4判・上製・函入・総7,746頁
◉本体揃価格300,000円＋税

東京大学新聞社 刊［昭和24年～昭和45年刊］

東京大学新聞 全11巻・別冊1

戦後東京大学における学生新聞は、『帝國大學新聞』のあとを受け、昭和二四年『東京大学学生新聞』としてスタートする。その後、昭和三二年『東京大学新聞』となり今日まで継続刊行されている。

今回の縮刷版の刊行は、昭和二四～四五年までであり、戦後日本の激動期を最もビビッドに反映した学生運動とその中で揺れ動く大学の姿を克明に記録している。

◉A4判・上製・函入・総4,276頁
◉本体揃価格200,000円＋税

一橋新聞発行所 刊［大正13年～昭和35年刊］

一橋新聞（いっきょう） 全7巻・別冊1

東京商科大学＝一橋大学は、戦前・戦後にわたって、日本経済・政治の担い手を輩出してきた。一方、学問と学園の自由を追求し、官僚主義に抗してきた歴史をもつ。『一橋新聞』は、数ある大学新聞の中でも、社会科学の総合大学にふさわしい立場から、時代の動きを最も批判的に受けとめようと努めた新聞のひとつであり、激動の近現代史の証言というべき重要資料である。

◉B4判・上製・函入・総2,592頁
◉本体揃価格155,000円＋税

三田新聞学会 刊［大正6年～昭和46年刊］

三田新聞 全14巻・別冊1

『三田新聞』は、日本における最初の学生新聞であり、大正デモクラシーの所産ともいうべき資料である。創刊号の一面中央に、福沢諭吉の「慶應義塾は一所の学塾として……」を掲げ、同紙の創刊の言葉には「三田輿論を喚起し、慶應義塾の一報道機関たるべし」と述べられている。以後、五十余年、「東洋創始」のスローガンを常に紙面に掲げ、三田新聞会によって継続・発行されてきた。

◉A4判・上製・函入・総5,154頁
◉本体揃価格260,000円＋税

小樽高等商業学校編纂部 刊［大正14年～昭和55年刊］

小樽商科大学新聞『緑丘』 全3巻

本紙は、大正一四（一九二五）年六月五日、小樽高等商業学校編纂部によって創刊され、大学名の変遷と共に数度改題しながらも、昭和五五年まで、学内外の動きを敏感に捉え報道しつづけてきた。創刊の年の一〇月に起きた「軍教反対事件」は、小樽高商の名を全国に知らしめるとともに、本紙の存在意義を一気に高めることとなった。本紙は、小樽商大の歴史を語るにとどまらず、広く時代の移り変わりを映し出し、日本近現代史の貴重な資料として、新たに「記事・執筆者索引」を付して刊行。

◉B4判・上製・函入・総1,200頁
◉本体揃価格75,000円＋税

荻野富士夫 編・解説

文部省思想統制関係資料集成 全11巻

本資料集成は、これまで顧みられなかった戦前文部省の治安機能に焦点をあて、大学・高校などの学生思想運動の取締・思想善導から出発した教育方策・原理が、教育全般・学術研究の統制・動員に拡張され、「教学錬成」の旋風を巻き起こし、戦争遂行体制の主導役となりつつ、教育の自壊に至る軌跡を、文部省学生部・思想局・教学局作成の資料を中心に、全四八点を収録し解説を付して刊行する。

◉A4判・上製・総4,000頁
◉本体揃価格275,000円＋税

＊表示価格はすべて税別

不二出版
▶ 〒113-0023
▶ 東京都文京区向丘 1-2-12
▶ TEL 03-3812-4433
▶ FAX 03-3812-4464
▶ 振替 00160-2-94084